

九州支部

□第32回

日本肺癌学会九州支部会

平成4年8月6日(木)

7日(金)

メルパルク熊本

当番幹事 原 信之

(国立病院九州がんセンター)

特別講演

肺癌画像診断の最近の動向

神戸大放射線科 河野通雄

肺癌の画像診断の第一歩は胸部単純X線撮影であるが、良い画像を得るための撮影条件、さらに画一的な良い画像を得るための手段としてCR、AMBERなどの新しいmodalityが登場したが、その利点、欠点について述べる。また、CT診断の新しい応用としてのHigh resolution CT, Helical CT, 放射線治療のためのCT simulation system, 更にMR特にGd-DTPAによる造影MRIの肺癌治療効果判定、再発腫瘍診断への役割について述べる。

1. 肺がん検診間接テストフィルムの読影結果についての検討

熊本県成人病予防協会

泉 薫子, 清田幸雄

同 肺癌読影班 志摩 清

絹脇悦雄, 他

熊本県成人病予防協会肺癌読影班では、胸部間接フィルムを用いて、50枚のテストフィルムを作製した。テストフィルムは、異常なし、肺癌、良性疾患などを含んだもので構成した。肺癌読影総合判定医36名(Aグループ)と研修医を中心とした大学医局員20名(Bグループ)

に、このテストフィルムを読影してもらい、その結果について検討した。

結果は、Aグループの正解率が、65.3%で、Bグループの46.5%に比べて高かった。Bグループでは、読み落としより読みすぎでまちがいの率の方が高かった。

又、読み落としした部位は、両側肺門の陰影が多く、読み過ぎた部位は、心臓の左横、左肺門などにやや集中しているという結果になった。

2. 長崎県における胸部X線肺癌検診の効果

長崎大第2内科 早田 宏

広瀬清人, 原 耕平

長崎県総合保健センター

迎 寛, 富田弘志

放射線影響研究所 早田みどり

数学モデルを用いて、肺癌X線検診の救命効果を推測した。用いた値は、長崎県癌登録(性年齢別罹患率・5年生存率)、地域住民検診成績(性年齢別受診率・感度)である。現行の検診(受診率34%)の救命率は6%であり、受診率が100%になった場合の救命率は15%であった。肺癌X線検診の効果には限界があり、肺癌死亡率をより低下させるためには、積極的な禁煙活動、感度のよい画像診断法の開発、肺癌治療法の向上が必要である。

3. 鹿児島県における老人保健法による肺癌検診の実施状況について

鹿児島県民総合保健センター

桶谷 薫, 黒木晶子

鎌田さよ子, 尾辻義人

鹿児島県立鹿屋病院 伊東祐治

鹿児島県の肺癌検診は、昭和62年3市町村1,827名より始められ、平成3年度には、70市町

村52,042名を対象としているが、過去5年間の肺癌検診の実施状況について報告した。発見肺癌は65例(10万対47)で、発見方法で見ると、間接より50例、喀痰細胞診から11例、両者から4例となった。発見方法と組織型では、腺癌32例中31例が間接で、扁平上皮癌26例では12例が間接、10例が喀痰細胞診で、4例が間接+細胞診で発見されていた。

4. 当院における検診発見肺癌の特徴

佐賀県立病院好生館外科

古川次男, 石田博徳, 米村智弘

吉田猛朗

当院での肺癌手術例256例を発見動機別に検診群145例と有症状群111例に分類して検討を加えた。検診群では腺癌が67%と多く、I期が62%と比較的早期の肺癌が多かった。検診群の予後は5生率51.3%、10生率45.1%で、一方有症状群では27.7%、24.3%と有意に検診群の予後が良かった。I期の5生率でも検診群の方が予後が良く、これは腫瘍径の小さい症例が検診群に多く、T因子がI期の予後に影響を与えていると思われる。

5. 胸部単純X線写真上2cm以下の肺癌症例の検討

佐世保市立総合病院内科

宮田 茂, 荒木 潤, 増本英男

須山尚史, 浅井貞宏

同 外科 南 寛行, 中村 譲

1988年から1991年までの4年間に当院で経験した胸部X線写真上2cm以下の肺癌21例について検討した。平均年齢は62.2歳で、21例中16例(76.2%)が検診例であった。画像所見としてはノッチが3例(14.3%)に、スピクラが8例(38.1%)